
大好きだから・・・

なみき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大好きだから・・・

【Nコード】

N0593S

【作者名】

なみき

【あらすじ】

好きな人ができない主人公、早瀬叶に好きな人ができた。その好きになった彼は叶の好きなタイプの人ではなかった。彼が、自分の恋で悩んでいるのを知った叶は一体どうするのか。ドキドキ(?)の恋愛物語を短編でかきました!!

(前書き)

この物語はフィクションです。

私は早瀬叶。^{はやせかなえ} 高校一年生。

私にはあまり話したことの無い、簡単に言えば一目ぼれの人が居る。彼の名前は秋野翔くん。^{あきのかける}

彼と話たのだったけど、同じクラスになって同じ委員会になって話すようになっただけだ。

私はいつの間にか彼のことを好きになっていたのだ。

私が異性に求めているものはとても高いと自分で思っている。

とっても優しく強くて守ってくれて私を引っ張っていつってくれる私よりも背の高い人が私のタイプ。

しかし、彼はそんなタイプではない。

優しいのと背が高い人は当てはまっているが、強そうにはみえないし私を守ってくれそうな感じにもみえない。

いつも笑っていて優しくてちょっと天然な爽やか系男子だ。

はっきりいって、私にはこういう異性は無理。

私のことを見透かされているようで……すこし怖くなってしまっからだ。

私はまだ、親友にも友達にも好きな人が居るなんていったことがない。

つというか、私はもともと恋愛には興味が無い。嘘だろと思われるのもいい。

母に私は言われてきたんだ。

「叶は自分より大人な感じがする人が好きなのよ。」

そんな中学生じゃ、好きな人なんてできないわよ。」

といわれてきた。

私は母の言葉を信じて「自分より大人な感じがする人」を探してき
た。

しかし、母がいった通り中学生で好きになった人はいなかった。
気になる人は居たけれど、何か違うと思いつぐにやめてしまってい
た。

こんな私にでも好きな人ができたなんて、自分でもとつても驚いて
いた。

私のクラスに秋野くんのことを好きかもしれないという女子が一人
いるのがわかった。

その子とはあまり話したことはないけれど、私よりもかわいくて運
動神経もよくて頭のいい子だ。

いかたは悪いかもだけど、私と比べるとその子のほうが断然いい
に決まってる。

私なんて、相手にならないのは本当にわかっていたこと。

周りの女子も彼女を応援しようとかがんばった。もちろん、私も。

自分よりも相手が幸せになってくれればいいって私は思っていたか
ら。

私も好きなんだって言ったら相手だって困るでしょ？

それなら、私は言わなくていい。言って得するのは自分だけ。

相手には迷惑がかかることだからね。ましてや、まわりの友達にも
それなら応援したほうがいいんだ。

だから私は応援するの。

こんなこともありつつ私は秋野くんのことをあきらめようと思ってい
た。

でも……あきらめることはできなかった。

だって……あんな言葉をかけられたら……あきらめることなんてで
きなくなるよ？

ある日の委員会の時、私は彼と軽くはなしていた。

「早瀬さんって好きな人いないの？」

「居るわけないでしょ。居るようにみえるわけ？」

いきなりの会話の始まりがこの質問できたのを驚きながらも、冷たい声で言った。

「やっぱそうだよね。」

噂で聞いたんだけど、俺のことが好きっていう人いるらしいね。知らない人の名前まで出てきてちょーびつくりした。

俺ね、話したことのない人に好きとか言われるのちょっと困るんだ。

付き合おうとしても最初は友達みたいな関係から始まるからさ。

「ふん。」

「皆そうだと思うよ。」

話はずらつと変わるけど……

まあ、好きな人には好きって伝えるのも大切だと思う。

逆にね好きな人に好きって伝えられないのは苦しいと思うんだよね。」

「……………」

私はその言葉が胸の奥に突き刺さったような感じがした。

今すぐにでも「好き」と伝えたいと思ってしまう。

でもね、言えるわけない……伝えられるわけがない。

友達のことを考えると伝えられない苦しさののっかってその倍苦し

くなる。

ただどね、私はその言葉であきらめることはできなくなってしまった。

言葉だけじゃない、彼の顔を見たときの彼の顔はとても苦しくみえ
たから。

胸の奥がきゅっと握られたようだ。

そして……ここから私の恋の結末……

今日は日曜日。友達と二人で私の家でだべっている時だった。

友達は秋野くんの中学の時の友達らしい。

ある歌手の歌の着信音が友達の携帯からなり私の部屋に響いた。

「あつ、先輩からだ。」

「先輩？」

「中学んときの先輩だよ。あらまゝそんなことが……」

「へ〜ってどうしたの？」

友達の顔が困ったような顔をし、携帯をうちながら教えてくれた。

「叶のクラスに、秋野翔っているじゃん。」

翔と先輩、中学んとき両思いだったんだ。

でもね、付き合おうと思っても両思いになった時期は先輩が3
年の時、そうして翔が2年の時。

先輩は受験で忙しくて付き合ってるどころじゃなかったの。」

「うん。」

私は真剣に友達の話を聞いた。

聞いておかなくちゃいけないと思ったから。

「先輩が卒業したら私たちが3年になるわけじゃん。次は私たちが忙しくなって二人は付き合ってる場合じゃないのよ。」

今は高校生なわけだし二人とも落ち着いてる時期だからさ、付き合わないかって先輩が翔に聞いたんだって。そうしたら、翔なんていったと思う？」

私は友達の問いにわからないとすぐに首を振った。友達は苦笑いをしながら答えを言った。

「付き合うことはできないだってさ。」

先輩は『翔くんのが好きだよ』って言って『翔くんは？』って聞いたらしいんだけど……

翔が『わからない』っていったんだってさ。

あんだけ必死にどうしようどうしようって私にメールしてきたのよ、

わからないってなにってんだろうね……翔は……」

「そうだね……」

私は胸の奥が痛くなってきた。

「好き」って伝えてないのにふられたみたいで、つらいよ……

「先輩は私たちと同じ学校なの？」

友達は携帯をとじ、私のほうを向いて首を横に振った。

「そうなんだ……」

これしか言う言葉が見つからなかった。

ここで笑っておけばよかったのかな？泣いておけばよかったのかな？
どんな表情をすれば良いのか……わからないや……

「なんか、重々しい話になったね！楽しい話をしようよ！！」

「そうだね！！」

そうして私たちは重々しい話を忘れていろいろなことを話あった。

そして翌日の放課後。今日もまた委員会の仕事で秋野くんと話す時間
間ができた。

私はふっと思い出したように彼に話かけた。

「そうだ！秋野くんは好きな人いないの？」

彼は少し困ったような顔で答えてくれた。

「居るよ……この思いがすきかはわからないけど……」

少し困った顔から泣きそうな顔になる。

「すごく……好きな、大好きな人が……」

「その人とは付き合ってるの？」

胸が痛い……すごく痛い……

私は彼の言葉をかき消すようにすぐに質問した。

「付き合っていないよ。付き合うことはできない。」

「なんで？」

彼は私の質問に目をまるくすしながら答えた。

「わっわからない。」

彼は頭を抱えて両肘を机にのせた。

わからないなら……私が教えてあげるよ。

「わからないなら、私が教えてあげる。」

秋野くんはその好きな人と付き合うのが怖いんでしょう？

だから、わからないんだよ。」

私は声を震わせて笑って見せた。

心はすごく痛くて苦しくて矢が刺さってるみたい。

でも、自分では悪いことはしていないって思えた。

秋野くんは少し涙目になり、ありがとうといいながら頭をさげた。

「ほらたった立った！！電話かメールしてきなさいよ！！」

秋野くんの腕を引っ張り立たせ、背中を押して廊下に出させた。

これで……私の恋は終わりにするの。

あなたのことが好きだから……大好きだからこそ私はあなたの恋を

応援するの。

これが失恋だつていわれてもいい。

私はいい恋を経験させてもらったと思えるから。

秋野くんは廊下にでて先輩に電話をした。

戻ってきた秋野くんは顔をまっかにしていつもの笑顔で戻ってきた。

「ありがとう。」

秋野くんは握手を求めて私に手を出してきた。

私はそつと秋野くんの手を握り微笑んでいう。

「私は何もしてないつもりんだけどね。まあ、どういたしまし
て。」

そして、お互い手をゆっくりと離していく。

これで、本当におわる。

「俺のことは翔って呼んでよ。俺も叶って呼ぶからさ。」

「わかったよ。」

悲しいけど、でも嬉しい。

前の関係よりも一歩お互いが近づいた気がする。

それだけでも、私はとっても満足だ。

そして、また委員会の仕事を始める。

こんな関係も悪くないな。なんて思いながらも仕事をしている私。

「もう。がんばってよ、翔!!」

私は翔の背中をばしっとたたいた。

「いった……わかってるよ」

翔は笑って言うてくれた。

いろんなキモチを体験させてくれてありがとう。

翔に出会ってよかったなあ〜って思ってるよ。

恋愛感情がはいつてるかはわからないけど、大好きだよ。

次の恋につながりそうだよ。

恋は終わり、本当の友達が始まる。

こんな恋も面白いでしょ？

(後書き)

感想などがあれば書いてくれると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0593s/>

大好きだから・・・

2011年10月7日17時59分発行